

第200回 「元気に百歳」クラブ「道草」(第9回通信句会) 開催

世界のアスリートたちの祭典、東京オリンピックが閉会しました。金、銀、銅メダルに輝いた日本国選手の皆さんには、異口同音に、この難しい時期にオリンピックを開催してくれたことへの感謝を述べ、そして自らの努力が結実した喜びを語りました。満面に笑みを浮かべるか、或は涙ながらに勝利の喜びを語る選手の皆さんとの言葉に感動致しました。次はパラリンピックが始まります。現状はコロナ禍の厳しい環境の中にはありますが、身体を鍛え、技を磨いてきた選手たちに、フルに技を発揮できる表現の場を提供したいです。

さて、私たちの「通信句会」も、今回で9回目になりますが、兼題の提示から選句のまとめまで、お役目を引き受けて下さる方々のご努力で、極めて円滑に運営できていると思います。今回はいつものメンバーの中から、木村栄女さんと中島憧岳さんが、ご欠席でしたが、次の15名の方が参加して下さいました。

芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、
金田月草さん、君塚明峰さん、高瀬荻女さん、辻柴楽さん、手嶋錦流さん、
原晶如さん、船戸清助さん、本間傘吉さん、森田多佳さん、芦尾白自然（15名）。

今月の兼題は、兼題1「秋風」と兼題2、「蜻蛉」です。8月、俳句の世界では秋になります。現実の季節感覚は、まだ夏の気配が濃厚ですが、皆さん「秋」を感じて詠まれた句の中から、皆さん次の方を天賞並びに最多得票賞（☆印）に選びました。どうぞご高覧下さい。

兼題1. 「秋風」

◎『水切りの石飛び跳ねて秋の風』	清助	天2☆7
◎『待ちかねし秋風そと膝頭』	月草	天1
◎『竹林をぬけ出来立ての秋の風』	白然	天1
◎『野辺を吹く今秋風の中にあり』	明峰	天1
◎『秋風や螺子巻きなほすオルゴール』	晶如	天1
◎『香控え友と寿司屋へ秋の風』	一光	天1

兼題2. 「蜻蛉」

◎『スイイスイ前え倣えと赤とんぼ』	和感	天1
◎『路地裏は下町の庭赤とんぼ』	明峰	☆6
◎『赤とんぼ河原遊びの石掴み』	晶如	☆6
◎『その面の懐かしくもあり鬼やんま』	傘吉	☆6

当季雑詠の自由題（=秋=）

◎『何事も無きかに青き秋の空』	明峰	天3
◎『ふるさとへ想ひ残して盆明けぬ』	歌多音	天1☆9
◎『百日紅突き抜けたる青き空』	白然	天1
◎『星月夜座敷わらしの据わりおる』	多佳	天1
◎『折り鶴や風化させじと原爆忌』	蒼樹	天1

兼題1. では、清助さんの句「水切りの石飛び跳ねて秋の風」が、天賞二つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。幼い頃から、水切りの石飛ばしは、幼い頃から何方にも身に覚えのあることでしょう。川面を石が何回飛び跳ねるかに興じました。季語「秋の風」が有効に効いています。次に月草さんの句「待ちかねし秋風そと膝頭」が、天賞一つを獲得しました。残暑のひと日、庭先で膝頭に涼しさを感じ、作者は「秋風」にハッとした

た。これを「秋をキャッチした瞬間」というのでしょうか。上五の「待ちかねし」が活きています。次に自然の句「竹林をぬけ出来立ての秋の風」も、天賞一つをいただきました。いたち川の上流、ウォーキングコースにある竹林を通過するとき、風の揺らぎと音に「出来立ての秋風」が閃きました。

次に明峰さんの句「野辺を吹く今秋風の中にあり」も、天賞一つを獲得しました。俳人上田五千石は、俳句を推敲する要諦として『「いま、ここ」に「われ」を置く』を、推敲のチェックポイントに見ます。この句はまるでそのお手本です。次に晶如さんの句「秋風や螺子巻きなほすオルゴール」も、天賞一つを獲得しました。季語「秋風」とねじを巻き直されたオルゴールとの対比です。オルゴールの哀愁を帯びた音色と秋風の淋しさ、えも言われない情感を呼び起こされます。もう一句、一光さんの句「香控え友と寿司屋へ秋の風」も、天賞一つを獲得しました。寿司の味覚を大事にするため、香りを控える心得をしています。じっくりと寿司を味わいます。豊かな秋を実感しますね。

兼題2. では、和感さんの句「スーイスイ前え倣えと赤とんぼ」が、天賞一つを獲得しました。赤とんぼがスイと眼前に現れたり、かと思えば、くるりと反転したりして、視界から消えます。赤とんぼのわがままさが、良く表現されています。次の三句が高得票六票を獲得し、最多得票賞（☆印）に選ばれました。最初は明峰さんの句「路地裏は下町の庭赤とんぼ」、次に晶如さんの句「赤とんぼ河原遊びの石掴み」が選定され、もう一句、傘吉さんの句「その面の懐かしくもあり鬼やんま」が、選句されました。

明峰さんの句は、路地裏を下町の庭として、草花の情景をクローズアップし、暮らしの中の人の動きを見、赤とんぼは草花に止まります。平穏かつ長閑な下町の映像シーンが見えます。次の晶如さんの句は、まさに河原に向かって石を投げる遊びがイメージされ、赤とんぼも石を掴んでいるようで、人と一緒に遊ぶ情景が浮かびます。次に傘吉さんの句は、鬼やんまを捕らえて、じっと観察しますと、幼い頃から見憶えのある鬼やんまの顔が、何とも懐かしく顔がほころびます。読者も鬼やんまの顔を思い起こし、共感し、一票を投じました。

当季雑詠の自由題では、明峰さんの句「何事も無きかに青き秋の空」が、天賞三つを獲得しました。江戸時代の俳人、田ステ女に「思ふことなき顔しても秋の暮」の句があります。青い澄み切った秋の空とはいえ、人生に多くの出来事が、思い浮かびます。印象深い句です。次に歌多音さんの句「ふるさとへ想ひ残して盆明けぬ」が、天賞一つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。

この句はコロナ禍の日々、故郷への想いは募りますが、故郷には帰れません。帰られないとそのままにお盆も明けました。何とも淋しさが増す日々が経ちます。自然の句「百日紅突き抜けゐたる青き空」も、天賞一つをいただきました。百日紅の紅花が晩夏の晴天にとけるように、哀しいほどの青さが空に満つ句が閃きました。

次の多佳さんの句「星月夜座敷わらしの据わりおる」が、天賞一つを獲得しました。星月夜のほの暗い奥座敷に、座敷わらしが居るというファンタスティックな情景は、お伽話というか、伝説というか、インパクトの強い句でした。もう一句、蒼樹さんの句「折り鶴や風化させじと原爆忌」が、天賞一つと獲得しました。原爆忌の季節。リメンバー原爆忌という覚悟を披露されています。夏の夜話、しっかり平和な毎日を語りましょう。

暑い夏の一日、デルタ株の台頭が警戒警報です。これからパラリンピックが始まります。用心に用心を重ねましょう。私たちの俳句サロンの開催は、二回記念を果たします。元気で暮らしていきたいです。ではまた、オンライン会議でお会いしましょう。

(自然記)